〔論文〕

保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討

―乳児保育研究　その３―

大　方　美　香
Mika Oogata
大阪総合保育大学

要約：今回の研究は、乳児保育の実践構造を解明するための継続研究である。前著論文（大方ら 2012）は、乳児保育の実践構造を４つのタイプ（本論文では A、B、C、D タイプとする）に分けた（注１参照）。本論文は、保育者への質問紙調査から乳児保育における指導計画作成のねらい編成に焦点をあて、４つのタイプから実践構造の実態にせまろうとした。まず、指導計画作成にはどのような様式が使われているのかを調査した。結果として、保育課程・年間指導計画・月間指導計画・週案・個別指導計画は 80％以上作成されていることがわかった。次に、年間指導計画において、ねらい編成の視点から検討を行った。D タイプ（子ども主体重視）が 90%、C タイプ（ねらい重視）が 80% 以上であることがわかった。活動からねらいをたてる A・B タイプ（活動重視）は、約 60% ずつ２つに分かれた。ねらいの編成方法には４つのタイプがあり、保育現場の交錯した状況や乳児保育は多様なタイプを選択していることが示唆された。月間指導計画においても、ねらい編成の視点から検討を行った。D タイプが 88.6% と多数であることがわかった。年間指導計画におけるねらいの編成と同じ傾向が示された。A・B タイプ（活動重視）は、内容からねらいをたてる A タイプ 63.6％、活動からねらいをたてる B タイプ 71.6％に分かれた。C タイプは 60% 以上において領域や心情・意欲・態度などからねらいをたてていることがわかった。「保育の振り返り」については、年間指導計画、月間指導計画のどちらも、D タイプが 80％と多数であり、C タイプが 56.3％という傾向が示された。以上、質問紙調査結果より、乳児保育の実践構造は４つのタイプが混在しているとわかった。今回の結果は、実践者、研究者で深めるべき課題を提示したと考えている。本論文が乳児保育における実践構造究明への一助となるよう、今後はヒアリング調査も行い、４つのタイプ検討を継続して行う。

キーワード：乳児保育、指導計画、実践構造

Ⅰ．問題の所在

１．乳児保育の実践構造解明の必要性

保育学への貢献は、乳児保育における実践を豊かにすることであるが、ねらいをどの文脈からひきだし妥当性を担保していくかは重要である。保育実践における「ねらい」もまた各保育者の判断に任されてきた傾向にある。すなわち、乳児保育の実践構造は、「何を育てる時期なのか」、「保育者はどのような働きかけが必要なのか」という課題意識に基づいて「どのような視点（ねらい）から乳児保育を行えばよいのか」を整理する必要がある。「保育の構造」という概念は、1980 年に金田利子が教育心理学会における自主シンポジウムで「乳児保育における発達研究の理論と方法をめぐって－保育の構造と子どもの発達－」と企画している。金田はその趣旨として「乳児保育の全体構造をとらえ、その中で、乳児の保育実践、とりわけ、発達と保育実践がより明確になりやすい乳児の保育実践をとりあげ、その実践の到達点についての共通理解を得ておきたいと考えた。また、乳児期の研究は、最近きわめて盛んになっているが、分野別の研究が多く、その相互の関連性や統合性を重視した研究がまだまだ少ない。乳児期の研究を『乳児保育』においてみようという方向は、まさに、この関連性、統合性をはかる乳児研究の方法であると考えられる。」と提案している。先行研究として Cinii でキーワード分類して調べた結果、編成論を念頭においた研究は少ない。保育・指導計画では 16 件（注１）であった。質問紙調査による先行研究では、三好年江（2012）「保育所における指導計画作成に関する実態調査（新見公立大学紀要 33, 169-175）」１件が検索された。三好（2012）の調査結果では、「指導計画の必要性については、保育士の 50% がとても必要、42% がまあまあ必要、合わせると約９割の保育士が必要であると

感じていることがわかった。一方、必要と思わない保育士も１割いることがわかった。また、指導計画における困り感や悩みは約６割の保育士が持っており、書き方に関することが最も多く、次いで保育の内容や理解である。(p169)」と述べ、「適切なねらい」を立てる必要性が記載されていた。また三好（2012）は「ねらいを立てる際はまず子どもの実態を捉え、子どもに育つことが期待される心情・意欲・態度は何かを読み取りねらいとして明確に打ち出し、保育の方向性や内容をきめていく。～子どもの実態を捉えきれず方向違いのねらいを立てたならば、子どもの育ちを支えることはできない。(p173)」と書いている。本論文では年間及び月間指導計画作成のねらい編成に焦点をあて、保育者への質問紙調査から実践構造の実態にせまる。

２．乳児保育の実践構造４つのタイプ(本論文ではA、B、C、Dタイプとする)

大方ら(2012)はすでに1965年と2008年の保育所保育指針を読みといた結果、乳児保育の実践構造の方向は一つではなく、多様な方向を含むものであることを確認している。その結果、実践構造は多様な４つのタイプ（本論文ではA、B、C、Dタイプとする）を見出し検討してきた（注２）。４つのタイプは以下に示すこととする。本論文では、この４つのタイプを理論上「乳児保育のあり方」を検討するため提案し、「この４つのタイプは実際の指導計画に生きている」という試案を、質的議論への布石として検証する。

Ⅱ．研究目的

前述したように、大方ら（2012）はすでに、乳児保育の実践構造として４つのタイプを見いだし検討してきた(注３)。またこの４つのタイプは、実際に保育現場で生きて交錯したかたちで使われていると考えてきた。しかしながら、４つのタイプの編成や指導計画作成への議論が未解決であることから、本調査では、４つのタイプの「ねらい編成」について特徴を解明することを目的とする。まず、年間指導計画及び月間指導計画の「ねらい編成」方法について保育者への質問紙調査を実施し、どのようにこの４つのタイプが実在するかを考察する。このため、「ねらい編成」方法については、タイプごとに抽出する。

Aタイプ（図１－１～図１－３）は単純活動重視、Bタイプ（図２）は望ましい活動重視である。いずれも「活動重視タイプ」であり、本論文ではあわせて「A・Bタイプ（活動重視）」とよぶこととする。その編成は、子どもの活動に焦点をあて、それを軸にねらいを考える。A・Bタイプ（活動重視）は、1965年保育所保育指針における実践構造である。1965年保育所保育指針（注２）は、領域を活動で括る（０歳児・１歳児）という考えから子どもの生活活動を「生活活動」と「遊び活動」に分類し（図１－１～図１－３）指導計画を作成している。

また、ねらいの編成では、「望ましい活動･経験」という活動のあるべき姿を意識することから、子どもの生活や遊びを保育者が選択・配列するという考え方である。また、1965年保育所保育指針の活動は、「望ましい活動･経験」という「望ましい」というかたちで保育の「ねらい」となる側面を意識したタイプといえる。すなわち、現在の活動面を捉えているのがAタイプであり、それを基礎として望ましい活動を方向付けたのはBタイプである。このねらい編成の考え方から二つは重なり合うこととなる（A･Bタイプ活動重視）。図２が示すように、望ましい「生活活動」と「遊び活動」が実践構造の軸となる。よって、望ましい活動がどのように発展するのかは整理がしやすい。

一方、Cタイプはねらい重視タイプである。2008年保育所保育指針における実践構造の一つのタイプである。ねらいが「心情・意欲・態度」で構造化されている。乳児保育の実践構造は、領域ごとのねらいの実現と考えれば、図３が示すように「養護と教育（５領域）」が実践領域の構造ともなる。したがって、**Cタイプは子どもの活動ではなく、子どもの心情・意欲・態度を焦点化していることがわかる。保育課程→指導計画という流れがあることからねらいを編成しやすいが、どのようにして活動に結びつけるのかが課題である。**

最後にDタイプは主体重視タイプである。主体重視タ

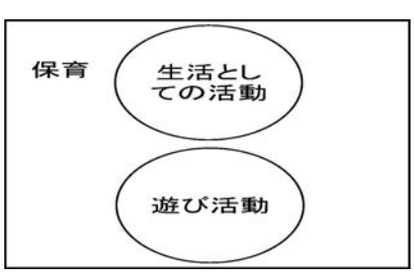

図１－１．Aタイプ（単純活動重視タイプ）

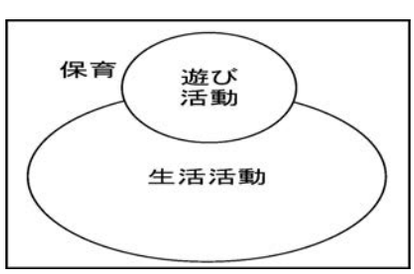

図１－２．Aタイプ（単純活動重視タイプ）

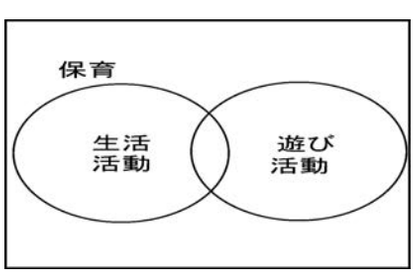

図１－３．Aタイプ（単純活動重視タイプ）

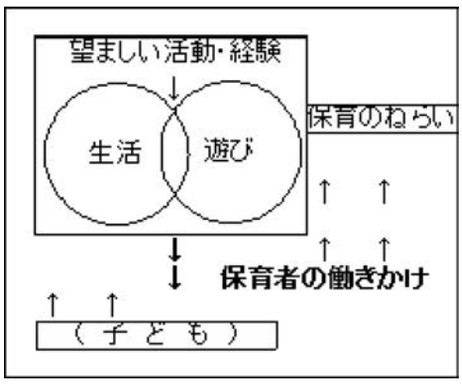

図２　Ｂタイプ（望ましい活動重視タイプ）

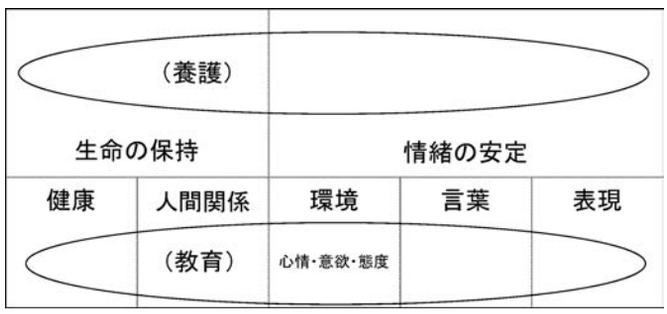

図３　Ｃタイプ（ねらい重視タイプ）

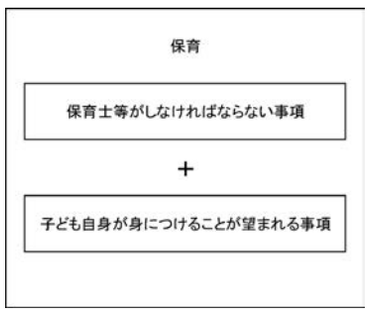

図４　Ｄタイプ(子ども主体重視タイプ)

イプは、2008 年保育所保育指針における実践構造のもう一つのタイプである。乳児保育の実践構造は、５領域の視点だけではなく、総合的に考えるという立場である。しかしながら、編成の考え方は、環境を通して「子どもの主体的活動」が子どもの育ちをきめるという。図４が示すよう､「保育者がする事項」として「保育士等がしなければならない事項」と「子ども発の活動への援助」として「子ども自身が身につけることが望まれる事項」という２つの事項をねらいに示すことから、保育者の働きかけを考えているともいえる。

以上のことを踏まえ、本調査は、４つのタイプの「ねらい編成」について特徴を解明することを目的とする。まず、年間指導計画及び月間指導計画の「ねらい編成」方法について保育者への質問紙調査を実施し、どのようにこの４つのタイプが実在するかを考察する。このため、「ねらい編成」方法については、タイプごとに抽出する。

Ⅲ．研究方法

１．調査対象

調査対象保育者は、近畿圏 412 名、内訳は公立保育所 71 名（17.2%）、民間保育園 266 名（64.6%）、公立こども園 15 名（3.6%）、民間子ども園 60 名（14.6%）である。このうち、現在０歳児担当者 80 名（19.4%）、１歳児担当者 102 名（24.8%）、２歳児担当者 92 名（22.3%）、合計は 274 名（66.5%）であり、全体回答（順位）への寄与は大きい。３・４・５歳児担当は 31 名（7.6%）であった。経験年数の平均値は 12 年である。

乳児保育に関する回答が得られた。分析対象者の属性は表１の通りである。

表１　分析対象者の属性

(1) 保育経験年数...(数量)

	合計	5138.50
	平均	12.47
	分散(n-1)	114.62
	標準偏差	10.71
	最大値	43.0
	最小値	0.0
	全体	412

(2) 所属

No.	カテゴリー名	n	%
1	公立保育園	71	17.2
2	民間保育園	266	64.6
3	公立こども園	15	3.6
4	民間こども園	60	14.6
	全体	412	100.0

(3) 現在の担当クラス年齢

No.	カテゴリー名	n	%
1	0歳児	80	19.4
2	1歳児	102	24.8
3	2歳児	92	22.3
4	3歳児	11	2.7
5	4歳児	11	2.7
6	5歳児	9	2.2
7	異年齢児混合	10	2.4
8	その他	97	23.5
	全体	412	100.0

その他の内容

複数のクラスを担当している

２．調査時期

調査実施時期は、2016 年７月半ばから８月半ばの１ヶ月の実施であった。

３．調査内容と方法

質問紙調査を郵送にて実施した。質問紙調査名は「乳児保育の実践構造に関する研究調査」、配布数 500 枚、回収率 82.4% であった。今回の研究は、乳児保育の実践構造を解明するための継続研究である。前著論文（大方ら 2012）の結果である、乳児保育の実践構造４つのタイプモデル（本論文では A、B、C、D タイプとする）を参考（注３）として質問項目を作成した。統計学的処理は、IBM SPSS Statistics Ver21 を用いて分析を行った。

本論文は研究目的にしたがって、保育者への質問紙調査による実態調査を実施した。調査内容は、以下の通りである。質問紙調査は質問７項目であったが、本論文では４項目について分析を行う。具体的には、０）属性に関する項目、１）指導計画の書式（質問１、園で作成している年間指導計画・月間指導計画などの書式について調べる。）、２）年間指導計画のねらい編成方法（質問２）、３）月間指導計画のねらい編成方法（質問５）、４）保育の振り返りについて（質問６、４つのタイプは、保育の振り返りにおいてどのように選択されているのかを調べる）、全て選択形式で回答を行う。前述したように先行研究が少なく、質問紙調査の先行モデルがないことから質問紙調査内容については今後の課題である。

４．倫理的配慮

倫理的配慮に基づき、質問紙回答者に対しては、書面により、インフォームド・コンセントを目的とした説明文を調査票の冒頭に入れ、調査協力に対する同意を得ることを必須とした。質問紙調査への回答は任意であること、回答の拒否や中断は可能であり、そのことを理由として不利益が生じることがないこと、研究の目的以外に調査データーを使用しないことなどを前提として、調査協力を依頼した。

Ⅳ．結果と考察

１．指導計画の書式（何を記述しているか）

単純集計により行った。指導計画の書式は、保育課程（84.7%）・年間指導計画（83.7%）・月間指導計画（93.2%）・週案（90.3%）・個別指導計画（84.7%）が８割以上作成されていることがわかった。期別指導計画・日案は 30 ～ 65% ほどの作成であった。乳児保育の指導計画作成は、年間指導計画・月間指導計画・週案が中心であることが示された。このことは、臨床的にみても多くがこのような傾向であり、一致するものである。（図５）

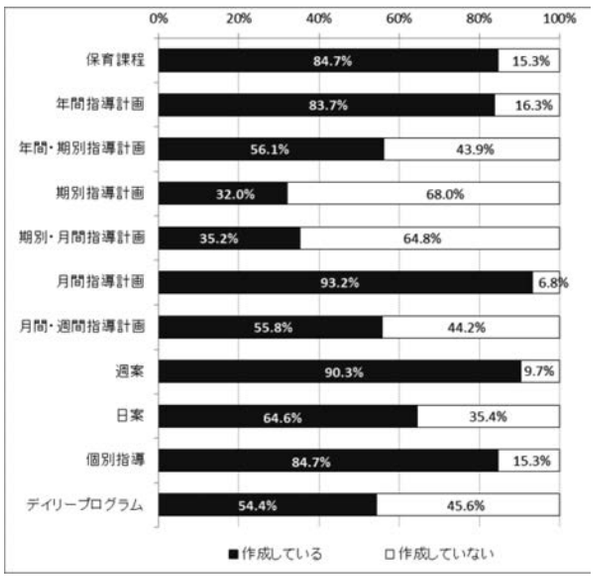

図５　指導計画の書式

２．年間指導計画作成におけるねらいの編成方法

前述したように、前著論文（大方ら 2012）では乳児保育の実践構造を４つのタイプ（本論文では A、B、C、D タイプとする）に分けた。（注１）このことを踏まえ、回答項目を４つのタイプに分類して関係をクロスしてみた。（表２－１）「よくあてはまる」、「あてはまる」と回答した割合は、D タイプ（子ども主体重視）が 90%、C タイプ（ねらい重視）は２つに分かれたが各々 80% 以上、活動からねらいをたてる A・B タイプ（活動重視）は３つに分かれたが、各々 60% 以上であり差は少ない。このことから、年間指導計画におけるねらいの編成方法は４つのタイプがあり保育現場の交錯した状況がわかった。年間指導計画作成の特徴は、どちらかというと D タイプ（子ども主体重視）、C タイプ（ねらい重視）の傾向が見られる。その他、「保育雑誌を参考にして月間指導計画を作成する（58.3%）」、「月間指導計画は独立してねらいを作成する（33.0%）」といった結果が示された。保育実践における困り感や悩みの実態が垣間見られたともいえる。（表２－１）

他方、４つのタイプとは別に、「ねらい」作成者については、「月間指導計画はクラス担任が交代で作成する（68.4%）」「クラス担当者が話し合ってねらいを作成する（65.5%）」「クラスの担当者が作成するためねらいは作成者に任せている（44.2%）」といった結果が示された。（表２－２）

表２－１　年間指導計画のねらいの編成方法

全体			よく あてはまる	あてはまる	「よくあてはまる」「あてはまる」の合計の割合	少し あてはまる	あてはまらない	「少しあてはまる」「あてはまらない」の合計の割合	合計
AB	10	月の具体的な保育内容からねらいを作成する	81	192	66.3%	82	57	33.7%	412
	8	活動のねらいと関係のねらいの2つを意識して作成する	87	166	61.4%	79	80	38.6%	412
	9	活動からねらいを抽出して作成する	83	175	62.6%	88	66	37.4%	412
C	2	保育課程→年間指導計画→月間指導計画のねらいを作成する	181	158	82.3%	41	32	17.7%	412
	11	年間指導計画→月間指導計画のねらいを作成する	165	178	83.3%	34	35	16.7%	412
D	4	子どもの姿からねらいを作成する	229	142	90.0%	18	23	10.0%	412
その他	1	保育雑誌を参考にして月間指導計画を作成する	108	132	58.3%	96	76	41.7%	412
	3	月間指導計画は独立してねらいを作成する	43	93	33.0%	97	179	67.0%	412

表２－２　ねらいの編成方法（作成者）

その他	5	クラスの担当者が作成するためねらいは作成者に任せている	68	114	44.2%	106	124	55.8%	412
	6	クラス担当者が話し合ってねらいを作成する	102	168	65.5%	94	48	34.5%	412
	7	月間指導計画はクラス担任が交代で作成する	195	87	68.4%	30	100	31.6%	412

表３－１　月間指導計画のねらいの編成

全体			よく あてはまる	あてはまる	「よくあてはまる」「あてはまる」の合計の割合	少し あてはまる	あてはまらない	「少しあてはまる」「あてはまらない」の合計の割合	合計
AB	9	その月の保育内容からねらいをたてる	74	188	63.6%	72	78	36.4%	412
	4	活動からねらいをたてる	110	185	71.6%	62	55	28.4%	412
	8	活動と関係性の両面からねらいをたてる	49	175	54.4%	101	87	45.6%	412
C	5	心情・意欲・態度からねらいをたてる	72	183	61.9%	89	68	38.1%	412
	6	５領域からねらいをたてる	101	166	64.8%	80	65	35.2%	412
	7	養護と教育からねらいをたてる	124	165	70.1%	50	73	29.9%	412
D	3	子どもの実態からねらいをたてる	203	162	88.6%	15	32	11.4%	412
他	1	先輩が作成した指導計画を参考に目標・ねらいをたてる	70	80	36.4%	115	147	63.6%	412
	2	保育雑誌を参考にねらいをたてる	72	104	42.7%	136	100	57.3%	412

３－１．月間指導計画作成におけるねらいの編成方法

前述したように回答項目を４つのタイプに分類して関係をクロスしてみた。（表３－１）「よくあてはまる」、「あてはまる」と回答した割合は、子どもの実態からねらいをたてるＤタイプ（子ども主体重視）が88.6%と多数であり、「２．ねらいの編成方法」と同じ傾向が月間指導計画においても見られた。活動からねらいをたてるＡ・Ｂタイプ（活動重視）は３つに分かれたが、「その月の保育内容からねらいをたてる」は63.6%、「活動からねらいをたてる」は71.6%、「活動と関係性の両面からねらいをたてる」は54.4%と分かれた。Ｃタイプ（ねらい重視）も３つに分かれたが、「５領域からねらいをたてる」64.8%や「心情・意欲・態度からねらいをたてる」は61.9%、「養護と教育からねらいをたてる」70.1%であった。

このことから、月間指導計画におけるねらいの編成方法は４つのタイプがあり、乳児保育現場の交錯した状況がわかった。月間指導計画作成の特徴は、Ｄタイプ（子ども主体重視）に年間指導計画作成と同じ傾向が見られる。他方、A･Bタイプは「活動からねらいをたてる」傾向が見られる。また乳児保育においても６割以上が領域からねらいをたてていること、特にＣタイプは「養護と教育からねらいをたてる」特徴が示された。

３－２．４つのタイプ、年齢別考察

次に、**４つのタイプ①～③を**年齢別に見てみる。

①Ａ・Ｂタイプ（活動重視）

年間指導計画作成におけるねらい編成は、３つに分かれた。（表３－２－１）

「月の具体的な保育内容からねらいを作成する」場合、０歳児（58.8%）、１歳児（70.6%）、２歳児（69.6%）、３～５歳児のクラス（64.5%）と１歳児が多いのは「生活活動・遊び活動」といった保育内容からねらいを編成して

表３－２－１　Ａ・Ｂタイプ（活動重視）年間指導計画

				よく あてはまる	あてはまる	「よくあてはまる」「あてはまる」の合計の割合	少し あてはまる	あてはまらない	「少しあてはまる」「あてはまらない」の合計の割合	合計
B	10	月の具体的な保育内容からねらいを作成する	0歳児クラス	15	32	58.8%	26	7	41.3%	80
			1歳児クラス	20	52	70.6%	18	12	29.4%	102
			2歳児クラス	18	46	69.6%	13	15	30.4%	92
			3～5歳児クラス	5	15	64.5%	6	5	35.5%	31
	8	活動のねらいと関係のねらいの2つを意識して作成する	0歳児クラス	22	24	57.5%	15	19	42.5%	80
			1歳児クラス	20	50	68.6%	17	15	31.4%	102
			2歳児クラス	25	37	67.4%	16	14	32.6%	92
			3～5歳児クラス	5	12	54.8%	11	3	45.2%	31
	9	活動からねらいを抽出して作成する	0歳児クラス	11	34	56.3%	22	13	43.8%	80
			1歳児クラス	28	45	71.6%	19	10	28.4%	102
			2歳児クラス	22	41	68.5%	15	14	31.5%	92
			3～5歳児クラス	4	12	51.6%	10	5	48.4%	31

表３－２－２　Ａ・Ｂタイプ（活動重視）月間指導計画

				よく あてはまる	あてはまる	「よくあてはまる」「あてはまる」の合計の割合	少し あてはまる	あてはまらない	「少しあてはまる」「あてはまらない」の合計の割合	合計
B	9	その月の保育内容からねらいをたてる	０歳児クラス	14	31	56.3%	21	14	43.8%	80
			１歳児クラス	20	47	65.7%	19	16	34.3%	102
			２歳児クラス	19	44	68.5%	14	15	31.5%	92
			3～5歳児クラス	3	18	67.7%	7	3	32.3%	31
	4	活動からねらいをたてる	０歳児クラス	22	37	73.8%	10	11	26.3%	80
			１歳児クラス	23	50	71.6%	16	13	28.4%	102
			２歳児クラス	28	41	75.0%	12	11	25.0%	92
			3～5歳児クラス	6	15	67.7%	9	1	32.3%	31
	8	活動と関係性の両面からねらいをたてる	０歳児クラス	4	31	43.8%	28	17	56.3%	80
			１歳児クラス	15	41	54.9%	24	22	45.1%	102
			２歳児クラス	15	41	60.9%	23	13	39.1%	92
			3～5歳児クラス	4	12	51.6%	12	3	48.4%	31

いる事が考えられる。「活動のねらいと関係のねらいの２つを意識して作成する」場合、０歳児（57.5%）、１歳児（68.6%）、２歳児（67.4%）と１歳児、２歳児で割合が多くなっている。これは、歩いたり話したりするようになることから保育者との関係がねらい編成に現れてきているといえる。他方３～５歳児のクラス（54.8%）は少ない傾向である。「活動からねらいを抽出して作成する」場合、０歳児（56.3%）、１歳児（71.6%）、２歳児（68.5%）と１歳児の特徴がみられた。他方３～５歳児のクラス（51.6%）は少ない傾向である。

月間指導計画作成におけるねらいの編成も、３つに分かれた。（表３－２－２）

「その月の保育内容からねらいをたてる」は、０歳児（56.3%）、１歳児（65.7%）、２歳児（68.5%）のクラスでは６割ほどであった。０歳児が少ない傾向がある。３～５歳児のクラス（67.7%）は１・２歳児と同じ傾向であった。「活動と関係性の両面からねらいをたてる」は、０歳児（43.8%）、１歳児（54.9%）、２歳児（60.9%）と２歳児の特徴が見られた。他方３～５歳児のクラス（51.6%）は少ない傾向である。「活動からねらいをたてる」は、０歳児（73.8%）、１歳児（71.6%）、２歳児（75.0%）と７割以上の傾向がみられた。他方３～５歳児（67.7%）は少ない傾向である。

②Ｃタイプ（ねらい重視）

年間指導計画作成におけるねらい編成は、２つに分かれた。（表３－２－３）

「保育課程→年間指導計画→月間指導計画のねらいを作成する」場合、０歳児（76.3%）、１歳児（83.3%）、２歳児（78.3%）と１歳児の特徴がみられた。他方３～５歳児のクラス（83.9%）も８割を超えている。「年間指導計画→月間指導計画のねらいを作成する」場合、０歳児（86.3%）、１歳児（79.4%）、２歳児（75.5%）は０歳児の特徴がみられた。他方３～５歳児（87.1%）も８割を超えている。

月間指導計画作成におけるねらいの編成は、３つに分

表３－２－３　Ｃタイプ（ねらい重視）年間指導計画

				よく あてはまる	あてはまる	「よくあてはまる」「あてはまる」の合計の割合	少し あてはまる	あてはまらない	「少しあてはまる」「あてはまらない」の合計の割合	合計
C	2	保育課程→年間指導計画→月間指導計画のねらいを作成する	0歳児クラス	34	27	76.3%	13	6	23.8%	80
			1歳児クラス	34	51	83.3%	10	7	16.7%	102
			2歳児クラス	40	32	78.3%	10	10	21.7%	92
			3～5歳児クラス	15	11	83.9%	1	4	16.1%	31
	11	年間指導計画→月間指導計画のねらいを作成する	0歳児クラス	33	36	86.3%	6	5	13.8%	80
			1歳児クラス	36	45	79.4%	12	9	20.6%	102
			2歳児クラス	50	27	75.5%	9	6	14.7%	92
			3～5歳児クラス	10	17	87.1%	1	3	12.9%	31

表３－２－４　Ｃタイプ（ねらい重視）月間指導計画

				よく あてはまる	あてはまる	「よくあてはまる」「あてはまる」の合計の割合	少し あてはまる	あてはまらない	「少しあてはまる」「あてはまらない」の合計の割合	合計
C	5	心情・意欲・態度からねらいをたてる	0歳児クラス	16	35	63.8%	15	14	36.3%	80
			1歳児クラス	12	47	57.8%	28	15	42.2%	102
			2歳児クラス	16	46	67.4%	21	9	32.6%	92
			3～5歳児クラス	4	11	48.4%	12	4	51.6%	31
	6	5領域からねらいをたてる	0歳児クラス	20	27	58.8%	22	11	41.3%	80
			1歳児クラス	26	46	70.6%	17	13	29.4%	102
			2歳児クラス	25	37	67.4%	19	11	32.6%	92
			3～5歳児クラス	6	11	54.8%	9	5	45.2%	31
	7	養護と教育からねらいをたてる	0歳児クラス	26	32	72.5%	12	10	27.5%	80
			1歳児クラス	30	41	69.6%	12	19	30.4%	102
			2歳児クラス	29	39	73.9%	12	12	26.1%	92
			3～5歳児クラス	6	11	54.8%	9	5	45.2%	31

表３－２－５　Ｄタイプ（子ども主体重視）年間指導計画

				よく あてはまる	あてはまる	「よくあてはまる」「あてはまる」の合計の割合	少し あてはまる	あてはまらない	「少しあてはまる」「あてはまらない」の合計の割合	合計
D	4	子どもの姿からねらいを作成する	0歳児クラス	55	23	97.5%	1	1	2.5%	80
			1歳児クラス	55	38	91.2%	3	6	8.8%	102
			2歳児クラス	54	34	95.7%	1	3	4.3%	92
			3～5歳児クラス	13	9	71.0%	5	4	29.0%	31

かれた。（表３－２－４）

「心情・意欲・態度からねらいをたてる」場合、０歳児（63.8%）、１歳児（57.8%）、２歳児（67.4%）と２歳児の特徴が見られた。１歳児が少ない傾向である。他方３～５歳児（48.4%）は５割をきっている。「５領域からねらいをたてる」場合、０歳児（58.8%）、１歳児（70.6%）、２歳児（67.4%）と１歳児の特徴がみられた。０歳児が６割より少ない傾向であった。他方３～５歳児のクラス（54.8%）と６割をきっている。「養護と教育からねらいをたてる」場合、０歳児（72.5%）、１歳児（69.6%）、２歳児（73.9%）のクラスでは７割ほどの傾向がある。他方３～５歳児のクラス（54.8%）と少ない。

③Ｄタイプ（子ども主体重視）

年間指導計画作成におけるねらい編成は、０歳児（97.5%）、１歳児（91.2%）、２歳児（95.7%）と全年齢が９割を超えている。他方３～５歳児（71.0%）は７割と少ない傾向がみられた。（表３－２－５）

月間指導計画作成におけるねらいの編成は、０歳児（93.8%）、１歳児（87.3%）、２歳児（93.5%）であった。他方３～５歳児（87.1%）は少ない傾向がみられた。年間指導計画と同じ傾向である。（表３－２－６）

④年間ねらいの編成と月間ねらいの編成クロス

以上①～③では、年間指導計画、月間指導計画におけるねらいの編成方法は年齢別にも４つのタイプがあり乳児保育現場の交錯した状況がわかった。次に、年間指導計画、月間指導計画の関係をクロスしてみる。（表３－２－７）

年間指導計画におけるねらい編成は、どのタイプも

表３－２－６　Ｄタイプ（子ども主体重視）月間指導計画

				よく あてはまる	あてはまる	「よくあてはまる」「あてはまる」の合計の割合	少し あてはまる	あてはまらない	「少しあてはまる」「あてはまらない」の合計の割合	合計
D	3	子どもの実態からねらいをたてる	０歳児クラス	47	28	93.8%	0	5	6.3%	80
			１歳児クラス	51	38	87.3%	5	8	12.7%	102
			２歳児クラス	48	38	93.5%	2	4	6.5%	92
			３～５歳児クラス	11	16	87.1%	2	2	12.9%	31

表３－２－７　年間ねらいの編成と月間ねらいの編成クロス

年間指導計画のねらいの内容 ＼ 月間指導計画のねらいの内容			A・B	C	D
			4.活動からねらいをたてる 8.活動と関係性の両面からねらいをたてる	5.心情・意欲・態度からねらいをたてる 6.5領域からねらいをたてる 7.養護と教育からねらいをたてる	3.子どもの実態からねらいをたてる
A・B	8.活動のねらいと関係のねらいの２つを意識して作成する 9.活動からねらいを抽出して作成する	全体	122	112	181
		0歳児クラス	20	20	32
		1歳児クラス	36	34	54
		2歳児クラス	31	29	49
		3～5歳児クラス	7	6	10
C	2.保育課程→年間指導計画→月間指導計画のねらいを作成する 3.月間指導計画は独立してねらいを作成する 11.年間指導計画→月間指導計画のねらいを作成する	全体	70	67	105
		0歳児クラス	13	13	26
		1歳児クラス	18	14	22
		2歳児クラス	14	11	23
		3～5歳児クラス	5	4	9
D	4.子どもの実態からねらいを作成する	全体	179	172	344
		0歳児クラス	34	33	74
		1歳児クラス	45	45	87
		2歳児クラス	47	45	84
		3～5歳児クラス	9	11	21

「子どもの実態からねらいを作成する」が一番多く見られる。他方、月間指導計画は４つのタイプが多様に見受けられる。クロス集計結果について、試行調査であるため十分な検討はしていない。しかしながら、Ａ・Ｂタイプ（活動重視）、Ｃタイプ（ねらい重視）、Ｄタイプ（子ども主体重視）の４つのタイプにおける一貫性や不一致があるのかについては検討した。その結果、一貫性は高くないことが示された。また、年齢的にはいくつかの特徴が見られた。月間指導計画におけるねらい編成において、１歳児はＡ・Ｂタイプ（活動重視）の傾向が多いことがわかった。０歳児はＣタイプ（ねらい重視）の傾向が多いことがわかった。Ｄタイプ（子ども主体重視）は０歳児、１歳児、２歳児ともに年齢による差はあまり見られなかった。乳児保育のねらい編成における実践構造はＤタイプ（子ども主体重視）が多いが、その他のタイプもあることがわかった。指導計画作成において、「子ども理解・ねらい・内容（活動）・関わり・評価」の５つが全て必要であるため、どのタイプも選ばれていると推察される。一方、子ども主体の傾向が見られることも推察される。

４－１．保育の振り返り

「保育の振り返りは行っているか」という問いに対して「はい」回答者は 93.9%（387 名）であった。「いいえ」回答者が 6.1%（25 名）と少数とはいえ振り返りをしない事実が示された。振り返りの質問項目は、選択式で行った（複数回答可）。（表４－１－１）「はい」回答者のうち、Ｄタイプ（子ども主体重視）は、「子どもの姿」が 79.1% と 80% 近くあり、ついでＣタイプ（ねらい重視）である「保育者の配慮」が 56.3% であった。Ａ・Ｂタイプ（活動重視）は、「活動内容」27.4%、「活動のねらい」30.2% と 30% 前後であり少数であった。特に「活動と関係」は 18.9% と少数であった。ねらい編成では多く見受けられたが、振り返りの視点が異なる傾向が示された。（表４－１－２）

４－２．４つのタイプ別、保育の振り返り

次に、年間指導計画及び月間指導計画における４つのタイプをねらい編成と保育の振り返りの関係をみる。（表４－２－１・表４－２－２）

年間指導計画及び月間指導計画のねらい編成及び振り返りのクロス集計結果について、試行調査であるため十

分な検討はしていない。しかし、Ａタイプ（単純活動重視）、Ｂタイプ（望ましい活動重視）、Ｃタイプ（ねらい重視）、Ｄタイプ（子ども主体重視）の４つのタイプにおける一貫性や不一致があるかについては検討した。その結果、明確なことはいえないが、一貫性は高くないことが示された。また、年齢別ではいくつかの特徴が見られた。

①Ａ・Ｂタイプ（活動重視）→保育の振り返り

年間指導計画作成においては、保育の振り返りは「子どもの実態」が一番多く、26.4％であった。全年齢において、Ｄタイプ（子ども主体）の振り返りが多いことがわかる。特に０歳児はこのタイプが一番多い（32.6％）。保育の振り返り「保育者の働きかけ（17.0％）」は０歳児（18.0％）と３～５歳児（20.7％）にこのタイプがみられる。保育の振り返り「子どもの育ち（16.6％）」は、１歳児にこのタイプが多い（18.9％）。保育の振り返りＡ・Ｂタイプ（活動重視）は２つに分かれた。「活動内容」10.4％に年齢差はあまりない。「活動のねらい」（11.1％）は１歳児（12.6％）、２歳児（12.2％）が少し多い。「活動と関係」は8.0％と少数であったが、０歳児（11.2％）は少し多い。

②Ｃタイプ（ねらい重視）→保育の振り返り

年間指導計画作成においては、保育の振り返りは「子どもの実態」が一番多く、29.0％であった。全年齢においてＤタイプ（子ども主体）の振り返りが多いことがわかる。特に０歳児はこのタイプが多い（32.7％）。保育の振り返り「保育者の働きかけ（18.2％）」は全年齢において20％を超えている。保育の振り返り「活動のねらい」は8.1％と少数であった。１歳児（10.8％）２歳児（11.3％）は少し多い。保育の振り返り「子どもの育ち（17.8％）」では、３～５歳児（20.7％）にこのタイプがみられる。「保育者の働きかけ」は、全年齢において20％前後で多い。「活動内容」（9.1％）に年齢差はあまりみられない。特に「活動と関係」は6.7％と少数であった。

表４－１－１　保育の振り返り

No.	カテゴリー名	n	%
1	はい	387	93.9
2	いいえ	25	6.1
	全体	412	100.0

表４－１－２　保育の振り返り（「はい」回答者387名の選択）

タイプ	No.	カテゴリー名	n	%
D	1	子どもの姿	306	79.1
AB	2	活動内容	106	27.4
	3	活動のねらい	117	30.2
	4	活動と関係	73	18.9
C	5	保育者の配慮	218	56.3
D	6	子どもが楽しんでいたか	127	32.8
C	7	子どもの育ちについて	195	50.4
	8	その他	12	3.1
		全体	387	100.0

③Ｄタイプ（子ども主体重視）→保育の振り返り

年間指導計画作成においては、保育の振り返りは「子どもの実態」が一番多く、27.0％であった。全年齢においてこのタイプの振り返りが多い。次いで保育の振り返りは「保育者の働きかけ（18.6％）」が多い。全年齢においてこのタイプの振り返りが多いが、特に０歳児（21.5％）、１歳児（19.2％）が多い傾向である。保育の振り返り「子どもの育ち（17.5％）」は３～５歳児（19.4％）にこのタイプがみられる。Ａ・Ｂタイプ（活動重視）保育の振り返りは、２つに分かれた。「活動内容」9.3％、「活動のねらい」9.9％と少数であった。特に「活動と関係」は6.6％と少数であった。

④保育の振り返り考察（年間指導計画及び月間指導計画）

以上、①～③のタイプについて、４つのどのタイプも「保育の振り返り」については、年間指導計画、月間指導計画のどちらも、「子どもの実態」と「保育者の働きかけ」が多い傾向が示された。子どもへの保育者の働きかけの一瞬、一瞬をとらえた振り返りをすることが示されている。（表４－２－１・表４－２－２）

年間指導計画は、Ａ・Ｂタイプ（活動重視）であっても、「保育の振り返り」については、Ｄタイプ（子ども主体）の振り返りが多いことがわかる。

他方、月間指導計画は、Ａ・Ｂタイプ（活動重視）で「保育の振り返り」についても、「活動内容」や「活動のねらい」から振り返るＢタイプ・Ｃタイプも示されている。また、１歳児はＡタイプ・Ｂタイプといったいずれも活動重視の傾向が多いことがわかった。しかし、ねらい編成は活動重視の傾向であるが、「保育の振り返り」については、あらゆるタイプに分かれていることがわかった。また、０歳児はＣタイプ（ねらい重視）の傾向が多いにもかかわらず、「保育の振り返り」は「子どもの実態」と「保育者の働きかけ」を選択する傾向が示された。Ｄタイプ（子ども主体重視）は０歳児、１歳児、２歳児ともに年齢による差はあまり見られなかった。

Ⅴ．結論と今後の課題

今回の研究は、乳児保育の実践構造を解明するための継続研究である。前著論文（大方ら2012）は、乳児保育の実践構造を４つのタイプ（本論文ではＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄタ

表４－２－１　年間ねらいの編成と振り返りクロス

年間指導計画・ねらいの編成		保育の振り返り		子どもの実態	活動内容	活動のねらい	活動と関係	保育者の働きかけ	子どもが楽しんでいたか	子どもの育ち
A・B	8.活動のねらいと関係のねらいの2つを意識して作成する 9.活動からねらいを抽出して作成する	全体	100.0%	26.4%	10.4%	11.1%	8.0%	17.0%	10.5%	16.6%
		0歳児クラス	100.0%	32.6%	10.1%	5.6%	11.2%	18.0%	7.9%	14.6%
		1歳児クラス	100.0%	25.2%	10.8%	12.6%	9.0%	17.1%	6.3%	18.9%
		2歳児クラス	100.0%	25.9%	9.5%	12.2%	7.5%	17.7%	10.9%	16.3%
		3～5歳児クラス	100.0%	24.1%	10.3%	10.3%	6.9%	20.7%	13.8%	13.8%
C	2.保育課程→年間指導計画→月間指導計画のねらいを作成する 3.月間指導計画は独立してねらいを作成する 11.年間指導計画→月間指導計画のねらいを作成する	全体	100.0%	29.0%	9.1%	8.1%	6.7%	18.2%	11.1%	17.8%
		0歳児クラス	100.0%	32.7%	9.1%	5.5%	7.3%	20.0%	10.9%	14.5%
		1歳児クラス	100.0%	30.8%	9.2%	10.8%	7.7%	20.0%	6.2%	15.4%
		2歳児クラス	100.0%	24.2%	9.7%	11.3%	8.1%	21.0%	11.3%	14.5%
		3～5歳児クラス	100.0%	31.0%	10.3%	0.0%	3.4%	20.7%	13.8%	20.7%
D	4.子どもの実態からねらいを作成する	全体	100.0%	27.0%	9.3%	9.9%	6.6%	18.6%	11.1%	17.5%
		0歳児クラス	100.0%	27.0%	9.0%	7.3%	7.7%	21.5%	9.4%	18.0%
		1歳児クラス	100.0%	27.4%	9.6%	11.0%	7.1%	19.2%	11.0%	14.6%
		2歳児クラス	100.0%	27.6%	8.5%	11.8%	6.9%	17.9%	11.4%	15.9%
		3～5歳児クラス	100.0%	25.4%	11.9%	9.0%	4.5%	16.4%	13.4%	19.4%

表４－２－２　月間ねらいの編成と振り返りクロス

月間指導計画　ねらいの編成		保育の振り返り		子どもの実態	活動内容	活動のねらい	活動と関係	保育者の働きかけ	子どもが楽しんでいたか	子どもの育ち
A・B	4.活動からねらいをたてる 8.活動と関係性の両面からねらいをたてる	全体	100.0%	26.0%	9.9%	10.1%	8.3%	18.2%	10.2%	17.4%
		0歳児クラス	100.0%	30.4%	8.8%	4.9%	9.8%	22.5%	7.8%	15.7%
		1歳児クラス	100.0%	6.7%	11.9%	14.2%	11.9%	22.4%	13.4%	19.4%
		2歳児クラス	100.0%	26.7%	10.0%	12.7%	8.7%	17.3%	10.0%	14.7%
		3～5歳児クラス	100.0%	26.3%	10.5%	5.3%	5.3%	21.1%	15.8%	15.8%
C	5.心情・意欲・態度からねらいをたてる 6.5領域からねらいをたてる 7.養護と教育からねらいをたてる	全体	100.0%	25.9%	10.6%	11.0%	7.7%	17.3%	10.3%	17.2%
		0歳児クラス	100.0%	27.7%	12.9%	5.0%	8.9%	22.8%	8.9%	13.9%
		1歳児クラス	100.0%	24.4%	10.4%	12.8%	9.8%	17.7%	10.4%	14.6%
		2歳児クラス	100.0%	27.9%	9.3%	13.6%	7.1%	16.4%	10.0%	15.7%
		3～5歳児クラス	100.0%	21.7%	13.0%	8.7%	6.5%	17.4%	13.0%	19.6%
D	3.子どもの実態からねらいをたてる	全体	100.0%	27.2%	9.7%	10.1%	6.0%	18.6%	11.1%	17.3%
		0歳児クラス	100.0%	28.2%	9.1%	6.8%	7.3%	21.4%	9.1%	18.2%
		1歳児クラス	100.0%	27.3%	9.2%	11.0%	7.1%	19.5%	11.0%	14.9%
		2歳児クラス	100.0%	27.9%	9.0%	12.3%	6.6%	17.2%	11.5%	15.6%
		3～5歳児クラス	100.0%	25.7%	12.2%	8.1%	4.1%	20.3%	13.5%	16.2%

イプとする）に分けた（注１参照）。４つのタイプは、編成の軸となる事項、編成の方法等編成手続きから分けている。前著論文の事例、臨床的研究では、いずれのタイプもあることを確認しているが、その実施範囲や繋がりが不明確であるため今回の調査となった。

１）まず、タイプ検討の前に、どのような指導計画が作成されているのかを検討した。そのため、指導計画作成にはどのような様式が使われているのかを調査した。結果として、保育課程・年間指導計画・月間指導計画・週案・個別指導計画は80％以上作成されていることがわかった。期別指導計画・日案は約30～65％の作成であった。この事から、乳児保育の指導計画作成は、年間指導計画・月間指導計画・週案が中心であることが示された。このことは、臨床的にみても多くがこのような傾向であり、一致するものである。

２）次に、年間指導計画において、ねらい編成の視点から検討を行った。結果として、Dタイプ（子ども主体重視）が90%、Cタイプ（ねらい重視）が80%以上であることがわかった。活動からねらいをたてるAタイプ（単純活動重視）、Bタイプ（望ましい活動重視）は約60%ずつに分かれた。このことから、ねらいの編成方法には４つのタイプがあり、保育現場の交錯した状況が示された。乳児保育は多様なタイプを選択していることがわかる。

３）月間指導計画においても、同じくねらい編成の視点から検討を行った。結果として、子どもの実態からねらいをたてるDタイプ（子ども主体重視）が88.6%と多数であることがわかった。年間指導計画におけるねらいの編成と同じ傾向が月間指導計画において示された。A・Bタイプ（活動重視）は、内容からねらいをたてるAタイプ（単純活動重視）63.6%、活動からねらいをたてるBタイプ（望ましい活動重視）71.6%に分かれた。Cタイプ

（ねらい重視）は60%以上において領域や心情・意欲・態度などからねらいをたてていることがわかった。年間指導計画と比べてみると同じ傾向が示されているが、Aタイプ、Bタイプをあわせてみると活動重視型が多いともいえる。

4）以上の1）～3）は踏まえているが、年間指導計画及び月間指導計画のねらい編成及び振り返りのクロス集計結果について、試行調査であるため十分な検討はしていない。しかしながら、Aタイプ（単純活動重視）、Bタイプ（望ましい活動重視）、Cタイプ（ねらい重視）、Dタイプ(子ども主体重視)の4つのタイプにおける一貫性や不一致があるのかについては検討した。その結果、一貫性は高くないことが示された。また、年齢的にはいくつかの特徴が見られた。月間指導計画におけるねらい編成において、1歳児はAタイプ、Bタイプといったいずれも活動重視の傾向が多いことがわかった。しかし、ねらい編成は活動重視の傾向であるが、保育の振り返りについては、あらゆるタイプに分かれていることがわかった。0歳児はCタイプ（ねらい重視）の傾向が多いことがわかった。しかし、保育の振り返りは「子どもの実態」と「保育者の働きかけ」を選択する傾向が示された。Dタイプ（子ども主体重視）は0歳児、1歳児、2歳児ともに年齢による差はあまり見られなかった。

5）結論として、乳児保育のねらい編成における実践構造はDタイプ（子ども主体重視）が多いが、その他のタイプもあることがわかった。指導計画作成において、「子ども理解・ねらい・内容（活動）・関わり・評価」の5つが全て必要であるため、どのタイプも選ばれていると推察される。一方、子ども主体の傾向が見られることも推察される。

以上のことから、次の課題があることを指摘しておきたい。

1）指導計画作成においては、「子ども理解・ねらい・内容（活動）・関わり・評価」という5つ全てを大切にすることが大切である。そのため、「ねらい」の編成方法が検討されなければならないことが示唆された。本論文の骨組みがあらわしている4つのタイプの融合は、編成論として可能かどうかが課題である。このことは、幼稚園教育要領・保育所保育指針・認定子ども園教育・保育要領をどう読みとくかにもつながる大きな課題である。保育界においては、「子どもの側にたつ」、「優しく接する」等といった本来は多義的である大きな言葉で話を帰着している場合が少なくない。その必要性も理解しているが、乳児保育における指導計画作成という具体的なプロセスを念頭におき、4つのタイプの融合の方向性を示す必要がある。

2）本論文においては、いまだ乳児保育の実践構造についての検討は深められていない。特に、1965年保育所保育指針における乳児保育の視点は検討されている部分もあるが深められてはいない。2008年保育所保育指針は、幼児と同じ方向で指導計画を編成する可能性があり、その具体的な課題を検討する必要がある。

3）ただし、基本課題は1）2）であるが、今回の保育者への質問紙調査によるデーターは、多様に分析される可能性を持っている。特に、4つのタイプに分類するための多様な視点と方法が結果に含まれている。今回未使用の調査結果グラフをはじめ、整理されていないことは、次回以降の論文で整理を行う。また、4つのタイプについてもさらに検討を加えなければと考えている。

4）今回の調査は試行的予備調査であるが、本調査に向けて課題解決を行いたい。特に、乳児保育における実践構造の検討として、指導計画作成という臨床的な研究は今回採用した質問紙調査は有効であるのかどうかの検討も深めたい。設定された設問の妥当性はあるが、より具体的で生きた保育の姿をとらえるためには、ヒアリング調査も加えていく必要があるともいえる。新たな研究では先行研究が少なく、丁寧な研究方法の検討を重ねていく必要があると考えている。本論文が乳児保育における実践構造究明への一助となるよう、今後は新人保育者や中堅保育者にヒアリング調査を行い、指導計画作成から4つのタイプの検討を継続して行う。

謝辞

本研究論文作成にあたり、玉置哲淳教授には多くのご指導ご助言をいただきました。ここに心より感謝御礼申しあげます。また、大阪総合保育大学　総合保育研究所、乳児プロジェクトのメンバーには、考察にあたりご示唆をいただきましたことを感謝御礼申しあげます。

注１）先行研究論文概要一覧表（年代降順）「キーワード：指導計画・保育」

	論文タイトル	著者	発行年	論文キーワード	掲載雑誌
1	保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討 － 乳児保育研究その2－	大方美香	2016	乳児保育、 指導計画、 保育所保育指針	大阪総合保育大学紀要 (10), A15-A30,
2	保育者の指導計画実践に依拠した検討：幼児教育における専門性の考察	保田 恵莉	2015	指導計画実践、幼児教育	総合人間科学 = General human science 3, 161-176,
3	零歳児クラスの指導計画について：クラス全体の月案の必要性	齋藤 信	2013	0歳児クラス、指導計画	越谷保育専門学校研究紀要 (2), 77-84,
4	保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討 － 乳児保育研究その1 －	大方 美香・小寺 玲音・玉置 哲淳	2013	乳児保育・指導計画の編成・保育所保育指針・保育学	大阪総合保育大学紀要 (7), A67-A94,
5	保育所における指導計画作成に関する実態調査：保育士へのアンケートをもとに	三好 年江	2012	指導計画・保育の基本・研修・子どもの実態	新見公立大学紀要 33, 169-175,
6	保育雑誌に掲載される年間指導計画モデルの分析と評価	田中 敏明・金丸 智美・永渕 美香子	2012	年間指導計画、保育雑誌	教育実践研究 (20), 155-161,
7	4歳児のクラス経営の視点と展開 － 保育におけるクラス経営の実証的研究(2) －	玉置 哲淳	2012	クラス経営・4 才児・指導計画	大阪総合保育大学紀要 (6), A77-A112,
8	幼児期の教育課程と指導計画に関する研究の動向：日本保育学会における口頭発表(1985～2009)を中心に	林 富公子	2011	教育課程指導計画	園田学園女子大学論文集 45, 259-268,
9	保育所保育課程の研究	丹羽 孝	2011	保育所・保育課程	名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究 (14), 1-23,
10	保育記録にみられる保育評価の実態	柾島 香代・原田 育美・椎木 奈津美	2011	保育評価	文京学院大学人間学部研究紀要 13, 311-319,
11	保育におけるカリキュラム	深見 俊崇	2011	保育・カリキュラム	保育研究 39, 18-23,
12	指導計画づくりに活かすための保育記録のあり方(1)－先行文献の整理を中心に－	瀧川 光治	2011	指導計画・保育記録	教育総合研究叢書 4, 53-70,
13	乳児保育における保育の計画	大方 美香	2010	保育所保育指針・乳児保育・指導計画	大阪総合保育大学紀要 (4), 129-144,
14	保育の質を高めるための指導計画の評価--担任保育者による評価内容の分類	鍛冶 礼子， 中島 千恵子	2009	指導計画	幼年教育研究年報 31, 71-81,
15	保育における個別指導計画についての一考察	室田 一樹	2008	個別指導計画	皇学館大学社会福祉学部紀要 (11), 151-163,
16	人間味の深化を願う領域「人間関係」の指導	宮田 暉朗	2008	領域「人間関係」	上田女子短期大学幼児教育学科保育者養成年報 28-35,

注２）保育所保育指針における領域区分

区分	保育計画	6 か月未満	1 歳 3 か月未満	2 歳まで	2 歳	3 歳	4 歳以上	
1965 年	保育計画・指導計画	なし	生活 遊び	生活 遊び	健康・社会・遊び	健康・社会・言語・遊び	6 領域	
2008 年	保育課程・指導計画	**養護と教育のねらい（5 領域のねらい）（心情・意欲・態度のねらい）** 年齢の記述なし						

2008 年：養護（生命の保持と情緒の安定）、５領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）、1965 年：６領域（健康・社会・言語・自然・音楽リズム・絵画製作）、1990 年・1999 年は養護が基礎的事項である他は 2008 と同じ

注３）①大方美香2016 「保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討－乳児保育研究その２－」　大阪総合保育大学紀要第　第 10 号　②大阪総合保育大学総合保育研究所乳児保育プロジェクト（代表大方美香）2014「乳児保育計画論～２つのタイプの事例を比較して～」ふくろう出版　③大方美香・小寺玲音・玉置哲淳 2012「保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討－乳児保育研究その１－」大阪総合保育大学研究紀要　第７号

＜引用・参考文献＞

Bredekamp, S. and Copple, C.（ed.） 1997 Developmentally Appropriate Practice in Early Childhood Programs Revised Edition, NAEYC

Copple, C. and Bredekamp, S.（ed.） 2009 Developmentally Appropriate Practice in Early Childhood Program Serving Children from Birth through Age 8 3rdedtion NAEYC

神田英雄　1998 「『受けとめる』『受容』についての実践提案の位置づけ」 第 15 回全国保育問題研究協議会･夏季セミナー報告「乳児保育」季刊保育問題研究（174）

金田利子　1980 「乳児保育における発達研究の理論と方法をめぐって－保育の構造と子どもの発達－」教育心理学会における自主シンポジウム 教育心理学年報 23, 93-94, 1984-03-30

金田利子、諏訪きぬ、土方弘子　2000 「『保育の質』の探究－『保育者－子どもの関係』を基軸として－」 ミネルヴァ書房

小林芳郎監修　2003 「子どもと保育の心理学－発達臨床と保育実践－」 保育出版社

小西行郎　2009 「子育ての神話　発達神経医の立場から」 心理学ワールド 46 号

厚生労働省　2008 「保育所保育指針」 フレーベル館

厚生労働省　2008 「保育所保育指針解説書」 フレーベル館

鯨岡峻、鯨岡和子　2002 「保育を支える発達心理学」 ミネルヴァ書房

黒岩英子、青山優子　2004 「乳児保育所１－２歳児運動遊びの実践と保育者の援助」 西南女学院短期大学研究紀要　50 号

光本弥生　2000 「『保育構造論』についての一考察」 中国四国教育学会　教育学研究紀要　46（1）626-631

三好年江、石橋由美　2005 「授業「乳児保育Ⅱ」の模擬保育から学生が学んだこと」 新見公立短期大学紀要 26

三好年江、石橋由美　2006 「初任保育者の担当クラスと子どもの遊びにかかわるときの問題意識からみた保育士養成校の課題」 新見公立短期大学紀要　27

松生泰子、神崎みち代、恵村洋子、梶美保、豊田和子　2004 「乳児保育の質的向上をめざして（4）：食援助の実践改善」日

本保育学会大会発表論文集（57）
松生泰子、佐田恵子、恵村洋子、梶美保、豊田和子　2007 「食の意識調査と“食援助プログラム”に基づく実践改善：乳児保育の質的向上をめざして（第１部自由論文）」 保育学研究　45（2）
松村和子、近藤幹生、花島香代　2012 「教育課程・保育課程を学ぶ」 ななみ書房
森上史朗　1988 「よりよい実践研究のために」 ミネルヴァ書房　別冊発達．7．
森田健宏、井上千晶　2009 「乳児保育担当保育士の資質と養成機関の課題－乳児保育担当への不安と「学･職」連携教育による充実」 夙川学院短期大学教育実践研究紀要（2）
無藤隆、高橋惠子、田島信元編　1990 「発達心理学入門Ｉ－乳児・幼児・児童－」 東京大学出版会
大場幸夫　2007 「こどもの傍らに在ることの意味－保育臨床論考－」 萌文書林
大場幸夫、網野武博、増田まゆみ　2008 「保育を創る８つのキーワード」 フレーベル館
大方美香　2016 「保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討－乳児保育研究その２－」 大阪総合保育大学紀要 第 10 号
大方美香　2015 「アメリカにおける乳児保育の現在と今後」 大阪総合保育大学紀要　第９号
大阪総合保育大学総合保育研究所乳児保育プロジェクト（代表 大方美香） 2014 「乳児保育計画論～２つのタイプの事例を比較して～」 ふくろう出版
大方美香、小寺玲音、玉置哲淳　2012 「保育所保育指針における乳児保育の実践構造の検討－乳児保育研究その１－」 大阪総合保育大学研究紀要　第７号（67-94）
清水益実　1984 「応用発達心理学の立場から：保育実践を通して『乳児保育』における発達研究を考える（大阪堺市･いづみ保育園の実践から）」（「乳児保育に関する発達研究の理論と方法をめぐって〔IV〕：保育の構造と子どもの発達」）教育心理学年報　23 号
清水茂、久米マスミ、小林友子 「幼児教育実践理論の研究」 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要　14 号
社会福祉法人日本保育協会　2009 「わかる！できる！新保育所保育指針　実践ガイド」 中央法規出版株式会社
玉置哲淳　2002 「新版幼児教育課程論入門」 建白社
玉置哲淳　2008 「指導計画の考え方とその編成方法」 北大路書房
玉置哲淳　2010 「乳児の人権保育実践展開の視点と目標（詩論）」 エデュケア 30
玉置哲淳　2011 「幼稚園におけるクラス経営論の課題と方向についての覚書－クラス経営の実証的研究所説－」
田代泰子　1985 「実践記録（１歳児保育）の分析から：「乳児保育」に関する発達研究の理論と方法をめぐって（V）：保育園における保育者と子どもの関係：自主シンポジウム」 教育心理学年報　24
土方弘子　2000 「保育所保育指針と乳児保育実践の課題（特集 保育指針改定を考える）」保育の研究（17）
山下俊郎編　1965 「保育所保育指針解説」 ひかりのくに株式会社
横松友義、浅野泰昌、近行あさみ、姚金柱　2007 「これからの保育構造論構築に関する一考察」 岡山大学教育学部研究集録 第 136 号
吉葉研司、汐見稔幸、土屋みち子、松永静子　2001 「176　乳児保育における「保育者－子ども相互関係形成」の重要性について：保育実践が「親－子ども」関係の改善に与える影響」 日本保育学会大会研究論文集（54）

Structures in Infant Nursing Practices in Childcare Policy

: Early Childhood Care Research, Part 3

Mika Oogata

Osaka University of Comprehensive Children Education

Abstract

This study continues research to understand infant care practice structures. In the previous paper from this study (Oogata, 2014), infant care practice structures were divided into 4 types of models (referred to in this paper as A, B, C, and D types) (reference Note 1). Based on the prior study, this paper focuses on the organization of the aims and procedures of creating teaching plans using a questionnaire survey targeting nursery school teachers and attempts to find how the 4 types fit into actual practice structures. The survey was composed of 5 sections, 1) teaching plan format (what is described), 2) organization method of aims, 3) style of monthly teaching plans (what is described), 4) aims of monthly teaching plans, and 5) reflections on childcare. Analysis results showed that all the types were present overall. Extracting types from the created formats, we found that 1) childcare curriculum, yearly teaching plans, monthly teaching plans, weekly plans, and individual teaching plans made up over 80% and semester teaching plans and daily plans made up about 30–65%. When we looked at 2) organization of aims, Type D (emphasis on children's voluntariness) made up 90% and Type C (emphasis on aims) made up over 80%. Looking at the organization of aims from activities, Type A (emphasis on simple activities) and Type B (emphasis on desired activities) were about 60% each. Required items in 3) the style of monthly teaching plans were part of a specific framework. Over 80% were aims, content, lifestyle, home cooperation, care support, and creating environment, and we can guess that these assumed Types C and D. On the other hand, both Type A play and Type B activities were 73.3% and were quite low. Type D, which is 4) setting aims based on children's actual state, was higher, 88.6%, and we found the same tendency as for 2). Type A, which sets aims based on activities, was 63.6%, and Type B was 71.6%. We found that for Type C, which was over 60%, aims were set based on the area, emotions, motivation, and attitude. Close to 80% were 5) children's appearance, followed by caregiver's encouragement 56.3%. Activity content and activity aims were low at around 30%. Thus, based on the questionnaire survey results, the structure of infant care practices is a mix of the 4 types. These results present issues that should be investigated more deeply by practitioners and researchers. There are few previous studies, and this paper will help investigate practice structures. In the future, we will conduct interviews with new and mid-level teachers in charge and continue to study the 4 types.

Key words：infant care, teaching plan, practice structure